

ひとをあやつる

その昔出会った入院患者さんです。忘れもしません。

仮に C さんとしておきましょう。

誤解の無いようにお断りしておきますが、私はここで C さんを非難したいわけではありません。人の生き様には多様性があり、私たち医療者も人間として、様々な影響を受けるものだというお話をしようと思います。実話からは少し改変しています。

C さんは、病気のため身体は不自由でしたが頭のいい人でした。

そのひとは病棟看護師という集団を、感情で操作するのが上手でした。

その手法はこうです。まず看護師ひとりひとりをいい人と、ダメな人に分けます。いい人はまめに褒めて持ち上げて可愛がり、ダメな人には個別に人格攻撃してクレームを出だして扱いに差をつけます。「A さんはこうしてくれたのにあなたは どうしてできないの？」気に入らないと「役立たず」「B さんは合わないから外して欲しい」といった具合に。

看護師は交代制で、互いが C さんとどういう関係か、全体を把握できません。

C さんにディスられた看護師は、仕事に落ち度はなくても、患者さんを満足させられない罪悪感を抱き「自分が至らないからかも」とまずは自分を責め、心を痛めます。

看護師は弱者に対して自ら丸腰で心を開きます。だからそこを刺されればもろに出血します。

一方、C さんに持ち上げられた人は、こそばゆい気持ちながらも褒められれば悪い気はしないし、もっとしてあげたくなるから、さらに利用される。

その結果何が起こるかと言えば、傷つけられた人と持ち上げられた人との関係に亀裂が生じます。結果としてチームが疑心暗鬼で分断してしまうのです。

このように、あるグループを内部で互いを反目させ、相手の集団を弱体化させて外から操ることを「分断統治」と言います。かつて大英帝国が植民地支配に用いた手法そのままです。互いに反目する集団どうしが弱体化すれば、上に立つこちらの言いなりに操作しやすい環境が整います。操作されている側は、互いのことを意識するあまりに、操作している主体に関心を払わなくなります。そこが思う壺というやつです。

C さんは看護師の感情を巧みに操ってそれを可能にしていました。

では C さんのその巧みさはどこから来たのか？

どれも推測ですが、まず C さんが生まれつき他者への共感が低いパーソナリティであった可能性があります。他者が傷ついてもそれを感知できない。これは善悪の問題ではありませんし、自身には選択できない事柄です。

もう一つは C さんの生い立ちにおいて、人を操ることが生き残りの手段だった可能性があります。そんな風に生きるしかなかったのかもしれない。

ひとは皆、それぞれやむに已まれぬ人生を生きています。

一方医療者は原則として、患者さんに対しては性善説に立って向き合うものです。

だから意図的な攻撃には非常に弱い。

その弱さを利用する人に一定の確率で会うことも事実です。でも医療者だからと言ってそれをすべて被って傷ついてあげる義務はありません。

他のひとがどうしているかは知りませんが、私はいつも同じ原則で接します。

患者さん・病者はたしかに気の毒な境遇におかれてはいるが、だからといって「かわいそうな人」とは見做しません。

「かわいそう」という感情は、ある意味自分の価値観の投影、そして一方的な断定と見下しに過ぎないと思うからです。

そして「かわいそうな人なら何をしても許されるのか？」と自らに問うのです。

きれいごとかもしれないが、患者さんとはひととして対等であるべきです。

緩和の現場とは、案外優しいだけの場所ではないのです。